54　難題聟（熱田のマーシリー）

昔、王朝時代にね、沖縄の王様の時代に、具志頭村と糸満市と境界のね、東側にね、糸満の平和記念堂の東側の村が具志頭村というところですよ。そこにね、白川タルガニーといってね、男のたいへん美男子がいたそうですよ。きれいな好男子がいたということですよね。

そこである時にね、商いに商売人が来てね、ここで、白川タルガニーという方のお家に来てね、お茶飲み話やりながらね、

「勝連浜の村にね、琉球一番の美人の女の人がいますよ」と話し出したんでしょうね。

「おお、そのくらい美人かなあ」と聞いたらね、

「うんまあ、沖縄であの人ぐらい美人はいないでしょう」という、今度はねえ、女の話が出たらしいんだなあ。

そしたら、白川タルガニーとは具志頭の方だから、この方も好男子であるわけよね。そしてね、この話の中からね、

「そんなにきれいか」と言ってね。

「じゃ、それを自分の目で見てみよう」ということでね、わざわざ具志頭から中部のね、勝連の南風原（はえばる）っていう、今は南風原村になっていますが、あの時は浜原といっていたんですよね。そこにたいへん美人がいたと。それで、これはね、この美人をね、わざわざ見に行ってね。一目見たらね、なるほどもう美人だしね、きれいな女が。そしてね、あんまりきれいだからね、すぐ結婚を申し込んだらしいね。

「ひとつ奥さんになってくれ」と、結婚申し込んで。そしたらね、女の方もね、口には出さないけれども、『ああ、好男子だなあ』というふうにまあ、見たんでしょうな。しかし女の方はね、威厳が強くてね。美女だからね。とにかくもう、好男子だというふうに胸内にはあってもね、なかなか表わさなくてね、表に。思い詰めたらしいんだな。

そしてね、この、私に会いに来るならね、頭のね、謎々みたいなことが初め、この女の方からね。頭がどれだけ切れるかというね、何と言うかな、謎々みたいなね、今の人では考えられない話さね。話で持ち掛けられてね。そしたら、

「二頭の馬にね、鞍をちゃんと載せて、これで一人で乗って来なさい」と。二頭の馬によ。鞍ね、鞍を置いてね、これに一人で乗って来なさいと。

言ったらね、これはもう、意味がわからなくてね。家に帰ってみてね、いくら考えてもわからんということでね。二頭の馬に鞍一つ掛けて、これに一人で乗って来なさいということはどういう意味かなあといってね、たいへん頭を悩ましたらしいんだな。そしてね、あるお年寄りに聞いたらね、

「あんた、このぐらいもわからんのか」と。年寄りはそれだけ長年世の中を渡って来ているんだから、頭は、世の中渡った人間だから、頭は優れて切れているんでしょうな。そこでね、お婆さんが教えてね、

「あんた、そのぐらいもわからんか」と言ってね、

「今、分娩前の馬に乗って、鞍を置いて乗って行きなさい」と言ってね、行ってみたら　ね、女の方はびっくりしてね。なるほど、分娩前だから馬が二頭あるわけですよね。鞍は一つしか置けないわけでしょう。

『ああ、なかなか頭は切れるなあ』というふうにまあ、思ったんでしょうな。今の人考えられないね。馬に乗って行くということ。馬二頭あるわけよ。おなかの中に一頭いるしね。一頭は我が身の馬だから。分娩前の馬にね。やがてお産する馬さ。乗って行くとね、鞍一つで行けるわけでしょ。それであの女の方もね、『ああ、これはすばらしい。頭がきれるものだなあ』と思ってね、期待していたんでしょうな。そしたらね、そのまあ、今になったらデートでしょう。家に忍びに遊びに来なさいということだからね、馬に乗って行ったと。

今度またね、謎々があってね。この簾（すだれ）ね、下げる簾よ。上と下のまつげね、あれを簾に例えてね、

「上の簾と下の簾が一つになって仲良くなった時に来なさい」ということで、また言われたらしいんだな。それしたらね、何の意味かまたわからなくってね、またこのお婆ちゃんに聞いたらしいんだな。そしたらね、

「眠たくなってね、目が上のまぶたと下のまぶたがいっしょになって眠った時分にね、夜中に忍んで来なさいということである」ということを言われてね、

「ああ、そうか」と言ってね、やっぱし夜中忍んで行ったらしいんだな。

そしたらまた、女の方はね、また謎々掛けたらしいんだな。そしたらこの謎々何かといったらね、お婆さんに聞かなきゃわからんわけよね。そしたらね、ここに、お盆の上にね、沖縄の言葉でね、小刀のことをシーグというですよ、シーグ。沖縄語では普通の小刀ではあるけれども、沖縄の言葉ではシーグというんですよね。これとお椀と、御飯が入ったお椀ね。それと、竹で作った箸ね。あれを置いたらしいんだな。それを見て女の方はね、すぐ自分の布団の床に就いたらしいんだな。そしたら、この出してあるのはね、この小刀とね、御飯と、お箸と。竹のお箸があるんでね、まあ、晩飯でも食べなさいということだなあと思って、御飯食べてしまったらしいんだな。そしたら女の方は怒ってね、

「あんた、御飯食べに来たの」と言ってね、すぐ突っ返したって。

「帰れ」と言って追われたらしいんだな。

追いやってもしかし好男子だなあということで、正面には出さなくっても恋心をその女の方は持っていたんでしょうね。

さて、女に振られて失恋をした男はね、追われてしまって、家に帰ってみたらね、このお婆さんにまた聞いたらしいんだな。

「こういうふうにして行って、ちゃんとしてあるんだが、この、こういうふうにしてね、この小刀とお椀と御飯と出して、これ食べてしまったらね、怒ってしまって追われたよ」ということでね、聞いてみたら、

「あんた、これもわからんのか」と言ったよね。

「すぐ私を抱いてくれという意味だよ、これは」。シグというのはね、すぐという、直ちにということさ。沖縄の言葉を方言から普通語に直すと、小刀のことをシーグというから、すぐという、急いでということさ、ね。椀というのは私という意味さ、ね。お椀。私という意味。ダキは竹、私を抱けと。米と。御飯は米でしょう。『すぐ私を抱き込め』という意味であるのを、わからなくって、御飯を出してあるから食べようということで、食べてしまってね、追われたということはね、それ、後でお婆さんから聞いてね、

「ああ、そうか、ああ残念だったなあ」ということでね、たいへんこのね、今までの何をね、悔しがったんでしょうね。こんなに何されて。嫌われてね。追われてもう、行きなさいということで。後でお婆さんに聞いてみたら、『すぐ私を抱き込みなさい』ということをわからなくて御飯食べてしまったということだからね。謎々がそれ、三つ続いているわけでしょ。

そこでね、男の方はね、恋に焦がれて結局、恋の病で死んでしまうわけですよね。女もね、また、好男子だったなあと、ただ女の義理でね、すぐ表面に出せなかったのが残念でね、これはもう、後で、女もまた恋に焦がれて死んでしまうんですよ。

そしてね、この遺骨をね、女の見えるところにと、男の場合はね。女の場合は男の見えるところにということで、遺骨ちゃんとを納めるということでね、両方の村の方々が寄り集まって、両方に行ってね。この突き当たりがね、ここの熱田のマーシリーだったという。それで、ここでぱっと会ってしまってね。

「じゃあここに二人ともいっしょに合葬しよう」ということでね、ここに祀ったということね。それで今までもずっとここは拝所ということでね、みんなで、村人でね、ここは熱田のマーシリーというところであるということが、伝説があるんですがね。

字糸満　野原由宗